仙獄学艶戦姫ノブナガッ!
第一次水着大戦

斐芝嘉和
挿絵／SAIPACo.

あとみっく文庫／PDF立ち読み版

あとみっく文庫
001

仙獄島全体図

SENGOKU-ISLAND INFORMATION MAP

◎面積：約80平方km（八丈島より少し大きい）
◎人口：約7,000人（うち、学生約5,000人）
原集落は島の東側に集中（須佐・武速地区）
学園周囲には熱帯性のジャングルが広がっている。

『第一章　乙女たちの戦い』より

兄・信虎は身長二メートルにもなる大男で、性格は傲岸不遜、驕傲で獰猛。まるで似ていない兄妹だが、ただ一点、深い焦げ茶色の澄んだ瞳だけはよく似ている。

その、暗い光が凝ったような美少女の瞳に、いま――青筋を浮かべ勇ましくそそり勃った巨根が、しっかりと映り込んでいた。

拘束衣に押し込められて芋虫のように転がっている兄の腰に、ひっしとしがみついた晴信。生臭く香る兄の男根に憂いを帯びた頬を擦りつけながら、艶めかしい吐息をこぼし、紅い舌を伸ばしてぴちゃり、ぴちゃり――。

「う、おぉ……ッ！」

信虎が呻き、厳重に拘束された身体を強く捩った。初めはなにも知らなかった晴信も、半年ほど毎日聞かされてきたから、いまではそれが悦びの咆哮だと理解している。

（ああ、お兄様……こんなに、なって……）

スルメのような臭気に細い眉を顰めつつも、美少女は信虎の淫棒を懸命に舐める。

半年前、兄の性欲を少しでも癒やせたら、と恐る恐る手淫にチャレンジした晴信は、一ヶ月ほどで壁に打ち当たった。いくら「気」を込め、懸命にしごいても、射精してもらえなくなったのだ。

信虎に悦んでもらおうとして始めたことだったから、獣のような呻き声に混じる不満の響きにはすぐに気づいた。手ではダメなのだ。満足してもらえないのだ。とすれば――。

「フェラチオ」という性技の存在は知っていたし、手がダメならソレをするべきなのだとも思ったが、実際に行うまでには長く辛い葛藤があった。

紅く硬く生臭い亀頭にキスをし、恐ろしげに捻れた肉茎に舌を這わせて、男根に温かなぬめりを体験させる――。

（汚い、臭い……気持ち悪い……）

唾液に濡れた舌を伸ばし、黒光りする巨根をいやらしく舐め上げているいまも、嫌悪感が消えたわけではない。なにしろコレは、ペニスなのだ。男が小便を出し、あるいは精液を迸らせる、おぞましい物体なのだ。

それでもなお、涙をこぼしつつも必死に舐めしゃぶっているのは、ひとえに兄のため。

「うぉぉ……ぐぅぅおおっ！」

恐ろしげに反り返った熱い淫肉にキスするたび、芋虫状態の信虎はビクンビクンと身をくねらせ、獣のように呻く。生臭い肉茎に伸ばした舌を這わせれば拘束衣を軋ませて背を捩り、自由にならない全身で悦びを表現する。

（これがイイのね、お兄様……ええ、大丈夫。私は、平気……）

震える心に言い聞かせた健気な妹は、ギチギチ軋む淫茎を握り直し、猛々しく張り出したエラの縁をなぞるように舐めた。カリ首の味の濃い場所を小刻みにせせったり、尖端に滲み出してくる先走り汁を啜ったりして、動けぬ兄をビクンビクンと痙攣させる。

兇暴な強姦魔としてみなから恐れられ、恨まれている信虎だが、晴信にとってはたったひとりの兄だ。苦しんでいる兄を見捨てるわけにはいかない。

（お兄様……お兄様が悦んでくれるなら、私、なんでもできる……）

使命感と愛情が入り混じり、胸の奥が熱くなる。嫌悪感が強ければ強いほど、自らの行為が尊いことのように思えてくる。

――ンちゅ……ちゅ……れちょ、ぴちょ――。

薄闇に湿った音を響かせて、猛る淫棒を舐め上げる儚げな美少女。

兄を狂わせたのは性欲だ、その性欲を適度に解消してやれば、昔の気弱そうな兄に戻るのではないか――靄（もや）がかかったようにハッキリとしない頭でそんなことを考えながら、晴信は懸命に舌を使い続ける。

（ああ……お兄様の味が、匂いが……舌に、こんなに粘ついて……）

舌や唇だけでなく、一本の太い三つ編みに編んだ黒髪にも、寒さに震える柔肌にも、淀（よど）んだ空気に漂う牡の匂いがじわじわ染（し）みついてくるような気がする。

込み上げてくる吐き気をこらえつつ、上目遣いに信虎の表情を窺いながら、糸が縒（よ）れたような裏筋をぴちょ、ぺちゃ、と舐め上げていると、

「うぅ、ぉおぁ……おぉ」

信虎の息が上擦り始めた。獣じみていた唸り声もどことなく丸く、穏やかになる。

兄が悦んでいる、こんなに優しい声で答えてくれる――コレデイイノダ、マチガッテハイナイ――だから、どんなにイヤでも続けなければ――。

（もっと、もっともっと、気持ちよくなってください……晴信は、お兄様のために……お兄様に悦んでいただくために、なんだってします……）

いつしか嫌悪は薄れ、晴信は奉仕する悦びに目覚め始めていた。兄の悦びこそが、妹の快感。信虎が喘ぐほど気持ちよくなれば、晴信はそれ以上に幸せな気分になる。

（ココですか、お兄様？　それとも、ココ？　うふふ……イヤだわ、お兄様ったら。どこを舐めてもビクン、ビクンって、オーバーなんだから）

恥垢の溜まりやすいカリ首を舌先で抉るように舐め、伸ばした舌の縁で切るようにしごき――兄の呻き声や背の捩り方に合わせて、責める場所や強さを微妙に変える。

「ウゥ……オオッ」

射精の瞬間が近づいたらしい。拘束衣に封印されて芋虫のようになった信虎が、しきりに身体を捩って低い声で呻く。

「ま、待ってください、お兄様。いましてあげますから……ね？」

頬を赤らめた美少女はいそいそと、制服のボタンを外し始めた。

兄とふたりきりとはいえ、こんなにも大きくなった乳房を見せなければならないだなんて――脳裏を過る羞じらいは一瞬のこと。

（お兄様の、おちん、ちん……）

柔肌を灼く熱さ、乳房に感じる硬さ――ソレを知っている乳谷が、羞じらう晴信を追い越して、はしたなく疼き始めた。

前を開け、ブラもずらして――薄闇にユサリと、たわわに実った白い乳果が揺れる。

見るからに柔らかそうな、大きな乳房だ。それでいて、少しも垂れていない。象牙のように輝く乳肌には溢れんばかりの若さが満ちて、晴信がどんな姿勢になっても見事な丸みは損なわれない。やや外を向いた頂点には紅い乳暈が鮮やかな彩りを添え、その真ん中には野薔薇の蕾のような乳首が可憐にプクッと勃起している。

（ああ、恥ずかしい！　……でも、お兄様のため、だもの……）

兄の苦しみを癒やすため、己の乳房に手を添えた晴信は、太い脚の間に身体を入れ、大きな腰に胸を押しつけるようにして、いきり勃っている男根に覆い被さる。

――ぬちゅ。

左右から寄せあわせた柔らかな乳谷に、真っ赤な亀頭が触れた。

「うう……ッ！」

閃く嫌悪感を押し殺し、胸を下げて、柔らかな胸の狭間に猛る牡肉を導き入れる。

己の唾液に濡れた淫棒は、火傷しそうなくらい熱く、そして淫らにぬめっていた。ぬぬ、ぬぬ、と双球を押し分け、たくましい硬さで乳房を揉み込んでくる。ゴワゴワした拘束衣

に乳首が擦れそうになると、赤々と輝く尖端の肉瘤が汗ばんだ谷間を突き抜け、顎の下へ亀の頭に似た姿を覗かせた。

「ふ、あ……ああ……」

なんという硬さ、なんという熱さ――滾る牡の欲望を繊細な乳肌に感じる。兄が私を欲している、妹の私を組み伏せ、貫き、激しく犯して――妹の胎内に己のすべてをぶちまけたいと、心の底から思っている。

（そんな、ダメ……いけないわ。兄妹なのに、そんな……そんな……）

軋む理性を裏切るように、儚げな美少女の肉芯にも火がついた。

ショーツの内側で割れ目が火照る。潤んだ花弁が疼く。

「許して、許して……お兄、さま……私たちは兄妹なの、これ以上のことはダメ……だからお願い、これで我慢、して……」

上擦った声で囁きながら、知らず知らず身体を揺らす晴信。

ぬちゅり、にちゃり――勃起ペニスが胸の谷間に滑り、灼けた鉄の棒のような熱さ、硬さに柔肉を揉み捏ねられる。巨根が前後するたび乳肌に擦り込まれる生温かなぬめりは、晴信がたっぷりと舐め塗した唾液、そして亀頭の先から溢れ出た先走り汁。

「ふぅ……ああ、お兄様の、おち……んち、ん……」

猛る牡肉が、乳房の間を我が物顔で往復する。

ゴツゴツとした肉茎に乳肉が揉まれ、勇ましく張り出したエラに乳肌をしごかれて――
兄のたくましさが、両手で寄せあわせている双球の芯まで響いてくるような気がする。
「おぉぉう……おぉぉう……」
美少女の動きに合わせ、大男が太い息を吐いた。
拘束衣の中で身体が震え、柔らかくて温かな乳房の谷間でペニスが強張る。
柔肉に喰い込んできた男根が、ドクン、ドクン、と脈打っていた。
(近い……もうすぐアレが、熱くて臭いドロドロが……来る!)
破裂寸前まで高まっている射精の予感。
鼻の奥に染みつくような青臭さを思い出し、晴信は頬を赤らめる。
口の中にはなぜか唾液が溢れ、秘裂の奥には熱い疼きが湧き上がる。
「ああ、ああ……お兄様……出して、ください……我慢などせずに……」
たくましい巨根に揉みまくられて、甘く痺(しび)れる乳谷。
乳芯まで歪(ゆが)められ、練り捏ねられて、桜色に染まった柔肉がトロトロになっていく。
「はぁ、ふぅ、はぁ……はあ、はあ、はああっ!」
滴(したた)る汗、こぼれる吐息。
あれほど強く感じていた嫌悪は、いつの間にか消え失せていた。
頬に妖しい陶酔(とうすい)を浮かべた晴信は、己の手で乳房を寄せあわせ、淫らな遊戯に没頭する。

次第に早く、激しく、谷間に挟んだ男根をしごき上げていく。
「お兄様、ああお兄様……柚菜は、柚菜はもう……ふぅう、はぁぁ……」
乳肌に感じる淫棒が、さらに硬く、さらに熱くなった。
煮え滾る溶岩を芯に溜め、おぞましい牡肉をミチチ、ギチチ、と軋ませて――。
――びゅくっ！　びゅぱっ！　びゅるる――――ッ!!
「……ッ!!」
ギュッと瞼を閉じた晴信の顔に、湿った音を立てて粘つく生臭い精液。
頬にも、額にも、瞼にも、唇にも――そしてもちろん形よい乳房にも――。
香汗に潤み淫熱に火照った柔肌に、いやらしく輝く濃厚な白濁液が点々と飛び散り、あるいは糸引きながら貼りついて、ねっちょり垂れる。
「うぅ……ああ、ああ……」
喘ぐ美少女の頬が、恍惚に輝く。
たったひとりの兄とともに、畜生道へ堕ちていく――それが運命ならば、仕方ない……。

胸の奥でどんなに叫んでも、くねる腰は止められない。柔肌のすぐ裏側に隠れた肉悦の琴線を、数十本のくねる細紐に掻き鳴らされているようだ。

しかも――見られている。

百人もの審査員、同数の島民、そして千人ほどもいそうな三学園の男子たちに、どこをどう弄られたらどんな風に身を捩るのか、どんな声で鳴くのか、どんな顔になるのか――恥ずかしいすべてをじっくり観察されている。

「やだ、やめて……見ないでぇっ！」

美少女優等生の心が、ついに折れた。股間を這い回る無数の眼差しから逃げようと、細いウエストを狂ったようにくねらせ、桃尻を揺らして乳房を躍らせる――と。

「いいぞ光秀！　その調子だ！」

最終泳者の信長が、両手をメガホンにして、よく通る声を会場中に響かせた。

「お前の尻はいい尻だ。だれも口には出さないが、触りてぇって思ってる野郎はごまんといる。もっともっと振って、審査員のオッサンたちを悩殺してやれ!!」

「の、信長……さん……」

これは演技だ、本気で羞じらっているのではない、と思わせることで、観客たちの気を少しでも逸らそうというのか――なるほどそんな手もあるのか、と感心しかけた光秀だったが、礼を伝えるつもりで対岸に目を向けた途端、そんな気持ちは霧散する。

「男なんて歯牙にもかけない、真面目で堅くて高嶺の花だった優等生美少女が、あられもない姿で悶え、鳴き、喘ぐ……くはぁ、たまんねぇなあ！」

人目も気にせず叫ぶ信長は、スケベオヤジですら呆れそうなくらい昂奮していた。サラシに押さえられた乳房を大きく弾ませて、岩風呂の縁で飛んだり跳ねたり。

「……なに考えてるの、あのヒト？　頭おかしいんじゃない？」

「私に訊かないで！」

呆れ顔のエリザに、カッとなって答える光秀。

生徒会長の信秀は尊敬できるし手放しで信頼できる人物なのに、その妹の信長はどうしてこうも非常識なのか――込み上げてくる怒りによって、おかしくなりそうなほどの恥ずかしさがほんの少し和らいだ。

もっとも、その程度のことでどうにかなるような窮地ではない。

コツを覚えたエリザの縄は、背に捻られた腕の肩から肘へと伸びる柔らかな曲面を、ツウ、ツウ――小刻みに震える太腿にはさらに多くの組紐が集まり、羞恥の桜色に染まった絹肌をいやらしい動きで舐め回っている。

「やぅンっ⁉　ぁあン、ぁああンッ！」

縄や紐に擦られた場所は、初めはくすぐったく、そのうち甘く痺れ出す。いやらしい愛撫は肌の裏側にも染みつくのか、縄たちが離れると狂おしいほどのもどかしさが湧き起こ

り、強制的にブリッジさせられた身体が焦れったそうにくねってしまう。
（だ、ダメ……感じては、ダメ……みんなに見られているのよ、こんなにたくさんの男のヒトに、み、み、見られて、いる……）
我慢しなければならない、ビクビク跳ねてはいけない。
性感帯がどこにあるか知られたら、きっと、きっと――未来に待ち受けているだろう恥辱を予感し、唇を噛んで耐えようとするのに、宙に浮いた尻が揺れ、仰向いた胸の上で乳房が大きくポヨポヨと揺れる。
「こら、チビスケ！　光秀をこっちに向けろって！」
大声で騒いでいる信長を無視し、
「そろそろ熟してきたかしら？　うふふ、どんな具合になっているのか、愉しみだわ」
意地悪な笑みを深めたエリザがさらに紐を増やした。
「あっ⁉　や、やめなさい……やめてッ‼」
柔らかな尻房にピッチリ貼りついている競泳水着の縁をくねる紐たちにまさぐられ、頬をカァッと赤らめる光秀。もぞもぞ蠢（うごめ）く蛇のような感触が、レッグホールから潜り込んでくる。必死に揺らす尻を軽く揉みつつ反対側へ抜けて、股布を引っかけたような形に。
「水着コンテストって、水着じゃなく中身を競うモノなのよ。だから審査員のオジサマたちに、中身を見てもらいましょうねえ」

サディスティックなロリッ娘が小さな手を上げ、なにかを掴んで引き下ろす仕草。
途端、光秀の股間を守っているオレンジ色の股布が、レッグホールを潜り抜けた縄にキュウッと細く締め上げられる。
「あ、あ……いやぁっ！」
――ぷるんっ！
Tバック状態にされた股布から、桜色に火照った尻房が弾けるように飛び出した。身を乗り出して見つめている審査員たちの目の前で小気味よく震え、瑞々しく輝いて、溢れんばかりの若さに裏打ちされた健康的な弾力を見せつける。
それですら、十二分に恥ずかしいのだが、本当に恥ずかしいのは仰向いた秘部。
余裕のなくなった布地が密着し、中央部分が浅く凹んで割れ目に喰い込んできた。ふたつ並んだ畝肉の形が、くっきり浮き上がってしまう。
同時に湧き上がる、心地よい痺れ。サポーター代わりの柔らかな裏地に、感じやすいビラビラや敏感なクリトリスが擦れ始めたのだ。
「あはは、『いやぁ』だって。可愛いお声ねお姉様。ひょっとして、服に擦れただけでもビンビンしちゃうの？」
「ち……違いますッ！」
慌てて否定しても、声がみっともないほど震えているから説得力がない。

「嘘を吐くなんて、悪いお姉様。おしおきしてあげる」
「ぁあっ⁉　ふぁ……ああっ！」
水着に軽く押しつけられた細紐たちが、エリザの意思を受けて小刻みに震え始めた。愛撫と呼ぶには弱すぎるタッチ――なのに、全身の性感帯を同時に責められているから、産みつけられる快感が何倍にも何十倍にも増幅される。
「やめて、やめて……ぁあ、う……ぁあン！」
赤ん坊の小指よりも細い紐の尖端に、布越しに責め立てられるクリトリス。
弾ける快美感をこらえきれずに反り返った背筋を捩れば、弾む乳房にも無数の組紐が群がり、何十何百という細紐に美しい曲面をサワサワ、コチョコチョ。
「やめてぇ？　嘘ばっかり。乳首をこんなに押ッ勃ててるクセに」
「あっ⁉　ひ……あぅうっ！　ダメ、ダメダメ……そこは、ダメぇえっ！」
ピンピンに張り詰めたオレンジ色の布地を突き破らんばかりに勃起していた乳首が、濡れた紐の尖端につつかれ、弾かれる。心地よい旋律（せんりつ）が左右の乳房に反響し――大きな丸み全体が燃えるように熱くなり、乳肌の感度が増してしまった。
（む、胸が……身体が……ああ、熱いッ！）
弾む乳房だけではない。
蓄積する快感に炙られて、全身の柔肌が性感帯になってしまった。

伸縮する競泳水着に揉みまくられた腹や腋が、痺れるほどに気持ちよくなる。腕や脛に喰い込んでいる荒縄のゴツゴツした感触すら心地よく、骨の髄まで蕩けてしまいそうだ。
太腿を舐め回す熱い陽射し、ぷりんぷりんと剥き出された尻肌を撫でていく微風――胸や股間に集中する観客の視線すら、針のように鋭く感じる。
「やぁ、ああ、ああ……ッ！　見ないで、見ないでぇえっ！」
羞じらえば羞じらうほど感度は増し、光秀の脳裏に眩い光が閃き始めた。
逆さになった顔では頬が弛み、わななく唇から震える声がとめどなく溢れ出る。
絶頂の瞬間が近い。
「ああダメ、ダメダメ……なにか来る、なにか来ちゃう……イヤ、イヤイヤ、みんなが見てる、みんなに見られてるのに……ぁあ、ああああっ！」
しなやかにブリッジした身体を捩り、揺らして、乳房を跳ね躍らせる光秀。
触手の群れに撫で回されている股間を突き上げ、さらに多くの視線を惹きつけて――。
「ひ、ひ……ひぁぁああ――――ッ！」
ビクンッ！　ビククンッ！
一際大きな春声を張り上げ、見えない鞭に打たれたように鋭く反り返る背筋。
必死にこらえていた反動なのか、絶頂感はいつもより遙かに強く、鮮烈だった。
頭の中は一瞬で真っ白になり、

（あ……あ……あああ……）

なにも考えられなくなる。

ハの字に開いた太腿がプルプル震え、柔らかな内腿に淡い筋がピーンと張り――。

――ぴゅる、ぴゅるる、ぷっしゃぁああっ！

迸った小水が、レッグホールと太腿の間の狭い狭い隙間から、勢いよく噴き出した。

「あ、は……あはは……」

衆人環視（しゅうじんかんし）の中、めくるめくアクメに達した優等生は、羞じらう余裕すら失っていた。

尿道を走り抜けていく小便にクリトリスの裏側を責め立てられて、どうしようもなく気持ちイイ。意識が蒸発していくような、なんとも言えない解放感。水着を伝って股間に広がる小水の、うっとりするような温かさ――理性の箍（たが）が外れているから、紅く染まった頬に恍惚の笑みを浮かべてうっとり、ぼんやり、呆けるだけ。

「あははッ！　いい歳したカッコイイお姉さんが、みんなの前でお漏らししたよ！　お風呂でオシッコするなんて、サイテー！」

お漏らししして放心した優等生を見上げ、ロリッ娘サディストは腹を抱えて大笑い。天使のように愛らしい顔が、無邪気な悪意に歪んでいる――と。

そのうしろを、白いスクール水着を着たグラマラスな美少女が、静かに静かに、波を立てないようにソッと泳ぎ抜けていく。北宮学園の第二泳者・北条〈鈴音〉氏康だ。

ぼんやりしていた美少女の顔が、急に生気を取り戻した。
いやらしく微笑んだ瞳がまっすぐに見つめているのは、もちろん、信長の股間に雄々しく反り返ったたくましい淫棒。
「こんなところに、こんなに立派なオチンチンが……」
「ば、バカッ！　違う、それは違うんだッ！」
焦った信長の声など、淫悦の虜となった元優等生の耳には届かない。白濁液に汚れた眼鏡のレンズに高々と突き上げられた褌の股布を映し、伸びやかなM字を描く脚線美の間へいそいそ這い込んで――横から覗き込んでいるエリザにようやく気づき、淫悦に紅く染まった頬を弛めていやらしく微笑む。
「すごいオチンチンね……これ、貴女が見つけたの？」
「うん！　でも私の穴にはちょっと大きすぎるみたい。お姉さんに譲ってあげる」
得意げなロリッ娘が偉そうに言うと、四つん這いになった光秀はブルッと身を震わせた。
「ホント？　ありがとう」
囁くように礼を言う間も、淫らに潤んだ瞳は信長の巨根から離れない。
「やめろ光秀、しっかりしろッ！　自分がなにしてるのか、分かってるのか⁉」
「ええ、分かってますわ……とってもとっても、気持ちイイことよ……」
――にゅるんっ！

妖しく微笑む優等生美少女の細指に、催淫液に濡れた股布が抓まれ、淫核の尖端をしごきつつ横へズルッと滑らされた。肉棒の切っ先に弾ける快感、淫茎を逆流して脳天まで突き抜けていく凄まじい電流。

「ふぁぁぁあ――――ッ！」

思わず背を反らし、腰を突き上げるようにしてビクンビクンと痙攣した信長は――いままで感じたことのない解放感を体験し、ああ、と呆けた声を漏らす。

ずっと頭を押さえられていた肥大化クリトリスが、ようやく自由を得たのだ。

（な、んだ……これ……き、もち……イイぃ……ッ！）

冷たい微風にさわさわと撫で回された淫核が、痺れるような悦びを孕みながらさらに一回り大きくなる。恐る恐る見下ろせば、紅くぬめり光りながらおぞましく怒張した、猛々しい肉棒。尖端に膨らんだクサビ型の塊は想像していたより遙かに大きく、クワッと張り出したエラは見るからに硬そうで――。

「ひ……ひ、ひぃぃ……ッ！」

普段の信長とは別人のように掠れた悲鳴が、わななく唇から溢れ出た。

本人も、いまになってようやく気づく。

信長が秀吉のような幼気な美少女しか愛せないのは、男根恐怖症だったから。

真っ赤に輝く肉の切っ先を天に向け、雄々しく反り返った淫棒を目の当たりにした途端、

いつもの勝ち気な性格が吹き飛んでしまった。
（イヤだ、イヤだ……こんなもの、イヤだッ！）
心臓が縮み上がり、恐怖に手足が強張ってしまう。ギュッと目を瞑り、心を閉ざして、おぞましい男根を意識から閉め出そうとする——しかし。
「く……う、うぅぅ……」
なんという存在感、なんという焦れったさ。
反り返った裏筋がズキズキとして、無視することなど不可能だ。
（生えてる……生えてる……アタシのアソコにヘンなのが……お、お、オチンチンが……こんなに大きく、生えちまった……）
おぞましいのに気持ちイイ。
見たくもないのに無視できない。
相反する感覚に苛まれ、心をふたつに引き裂かれそうになっていると——。
「まあ、なんと御立派な……」
頬を蕩けさせた光秀が、紅玉のように輝く肥大化クリトリスへスッと顔を寄せた。
「オチンチンをこんなに紅く腫らして、さぞお辛いでしょう……いいですわ。先輩の私が責任を持って、優しく癒やしてあげましょう」
蕩けるように微笑みつつ、浅瀬についていた手をゆっくりと上げる。細指に絡みついた

白濁液が、淫らに光る糸を引きながら、トロリ、トロリ、トロリ――。
生真面目な優等生がいやらしい粘液を弄んでいる姿は、妖しく美しかった。切羽詰まった状況も忘れ、思わず見惚れてしまう信長だったが――紅く大きく怒張した己の肥大化クリトリスに蒼白くぬめり光る細指が近づくのを見て、ハッと我に返る。
「ま、待て待て、待って……！」
「大丈夫ですよ、信長さん。利家さんも勝家さんも、白目を剥くほど悦んでくれました」
「ああバカ、やめろ光秀、や、や……あっ⁉　あ、ぁぁ、あ、あ、あひぃぃッ！」
――ぐちゅり！
蒼白くぬめり光る細指に、真っ赤な肥大化クリトリスを力強く握り締められた。
敏感な淫核の上にニュルリと滑る柔らかな細指、限界まで張り詰めて感度を高めていた表皮に容赦なく擦り込まれる催淫成分。
（あ、あ、熱いぃいっ！）
光秀に握り締められた肉棒が、燃え出しそうなくらい熱くなった。しごかれた快感と催淫液の作用によって、快楽神経に悦びの電流が激発したのだ。
両手を上下に連ねてもなお亀頭ひとつ半も余る長大な疑似ペニスが、芯に熱い疼きを溜めてミチチ、メキキ、とさらに怒張。
「あは☆　熱い……硬ぁい！」

手指を押し返してくる火傷しそうな熱さ、たくましい硬さに、光秀はうっとりと目を細めた。すっかり握り慣れた様子で、

「それに、すごく長い……こんなモノで奥を突かれたら……うふふ、ドキドキしてきた」

鋼のように強張った肉茎をヌチュリグチュリとしごく。

「ふひ、ひ……ぁあやめろバカ、ダメ、ダメ、ダメダメ！　しごくな、しごくなあッ！」

細腕を背後につき、白い喉を反り返らせて、ビクンビクンと痙攣しながら必死に首を振る信長。前に滑り出た尻が、悦びに打たれて跳ねそうになる。伸びやかなM字を描いた白い脚線美が立てた膝を外に向け、駆け抜ける快感電流に小刻みに震える。

（なんだ、これ……こ、コレが、おちんち、ん……!?）

自分の指で恐る恐る触れたときとはもちろん違うし、秀吉の舌にピチョピチョ舐められたときの感触ともまるで違う。

股間と頭の芯がピーンと張り詰めた琴線によって直結され、妖しい手つきで爪弾（つまび）かれているようだ。光秀の呼吸や鼓動が、細指を伝って巨根に響く。白濁液にまみれた美少女の手に、カリ首から根元までニュチュ、ギュチュ、としごかれるたび、おぞましく怒張した淫棒に熱い激流が渦巻き、背筋を伝い頭の中まで流れ込んできて、羞じらう気持ちや抗う理性が白く掠れていく。

「や、あ、ぁああっ！　やめ、やめて……ダメ、光秀ぇぇえっ！」

普段のガサツな振る舞いからは想像もつかないほど可憐な声で、信長が鳴いた。凛々しい眉根が悦びの朱鷺色に染まり、ふわ、ふわ、と開く。切れ長の瞳は熱っぽく潤み、野苺のように紅くぷっくりとした唇がわなないて、淫棒をしごく手の動きに合わせ、

「ああ、ああ！」

と上擦った吐息を漏らす。

頬を赤らめた信長がイヤイヤと首を振るたび、麓をサラシに緊縛されたたわわな乳房が重々しく弾んだ。胸先の乳首はますます紅く、さらに硬く勃起して、いまにも弾けてしまいそう。芯から込み上げてくる淫悦に炙られて乳肌が艶めかしい桜色に火照り、激しくぶつかりあう乳谷には香汗の滴が光る珠となって飛び散る――と。

「まあ、こんなところにまだ活きのいいオチンチンが……」

「学生の分際で、独り占めなんてズルいですわよ」

酔ったように頬を赤らめた晴信とジャンヌ学長が、ふらふらした足取りで集まってきた。光秀、晴信、ジャンヌ学長は、だれよりも早くイソギンチャクの触手に犯され、淫悦の虜になった三人だ。手近な学生やＶＩＰはすべて精根尽き果てるまで喰い尽くしたらしく、

「私にも握らせてくださいな、光秀さん」

「待ちなさい、ふたりとも。ここは年長者の私がまずお手本を……」

込み上げてくる淫欲を抑えきれない様子で淫らに微笑み、細い肩をぶつけあいつつ、形

よい乳房を競うように揺らす。
それを見ていたエリザが、
「ったくもう、浅ましい牝どもね！　信長のオチンチンは一本しかないんだから、ケンカしないで、三匹で仲よく舐めなさい！」
揺れるみっつの桃尻を、ペチペチと小さな手で打った。
三人よりも歳下のあどけない美少女に、牝だと蔑まれ、偉そうに命令されたのに――光秀も晴信も、ジャンヌ学長でさえも、まったく腹を立てなかった。
それどころか、「はぅん」と甘え声で鳴き、エリザの命令に素直に従う。
「ど、どうしたんだお前ら⁉　なあ、しっかりしろよ！　まさか舐めるんじゃないだろうな？　き、汚いぞ、ほら……白いドロドロで、グチュグチュになってるんだぞ⁉」
焦る信長の右脇に晴信が、左脇にジャンヌ学長が、桜色に火照る桃尻を揺らしつつイソイソと移動した。脚の間にいた光秀も尻を振りながら少し後退り――天を突かんばかりに屹立している真っ赤な巨根を軸に、百二十度ずつ位置を違えた三匹の牝。
「こんなに素敵なオチンチンを前にして、ケンカするなんて……時間の無駄ですわ」
「ええ、仲よく舐め舐めしましょう」
「いけない、涎が溢れてきましたわ……」
淫悦に酔った艶めかしい顔が、笑んだ口から紅い舌を長く伸ばした。

白濁液まみれの淫茎に、熱い鼻息を吹きかけつつ――ぬちょっ！
「にゃひっ⁉」
ぺちょ、ぴちょ！
「うぁ、ぁあ、ぁうぁぁあっ！」
三枚の舌に舐め上げられた肥大化クリトリスに、凄まじい電流が渦巻いた。
ザラザラした味蕾に催淫液が拭われるたび、淫棒の表面に快感が弾ける。
強張った裏筋の根元から真っ赤にむくれた亀頭まで、広げた舌に舐め上げられれば、背に熱い津波が駆け抜けて、尖端の肉クサビが軋みながらさらに怒張。
「ンはぁ……美味しい！　精液の苦しょっぱさに愛蜜の甘酸っぱさがほどよい具合で入り混じり、舐めても舐めても飽きが来ない……」
おっとりした垂れ目をトロンと弛め、裏筋をレロンレロンと舐め上げていた光秀が夢見心地に言えば、
「ンちゅ、ちゅ……お兄様のより、細いけど……むちゅ、ちゅぱっ！　この反り返り方、素敵……亀頭もこんなに、勇ましくて……ああ、胸がウズウズしてきた……やっぱり胸でしないと、満足できない……」
兄との秘め事を思い出した晴信が、淫悦に蕩けた瞳に涙を浮かべ、手に入れ損ねたなにかを取り返そうとしているように、真っ赤な巨根に熱烈なキスを繰り返す。

信長の左腰にしがみつき、細い首を伸ばしているジャンヌ学長は――。
「神よ、神よ、ああ神よ……ンちゅっ！　ンはぁっ！　なんという甘露、なんという舌触り……ああ神よ、この世にオチンチンを作りたもうたことを、心より感謝します！」
ほかのふたりよりも経験豊富であることをアピールするかのように、屹立する淫茎に舌を絡め、カリ首を穿るように舐め、高い鼻の天辺を亀頭に擦りつけて――持てる知識と技術を総動員して、信長の淫棒を責めまくる。
「や、やめろ……やめ、本当にダメ……くぅ、ぁ、うぅぅッ！」
喘ぐ信長がしきりに腰を捩り、大きな乳房が弾むほど身悶えても、三方向から迫る美女たちからは逃れられなかった。
ブウンと揺れた亀頭が、ジャンヌ学長の形よい鼻を叩く。
「あうンっ！」
淫棒の尖端に激感が弾け、こらえきれずに腰を突き上げると、光秀の柔らかな頬に裏筋が擦れ、反動で捻れた先には晴信の口が待ち受けていて――。
「ンちゅっ！　ちゅっ！　カリ首、美味しい……！」
さらに強く、さらにいやらしく、バラの花びらに似た唇に舐めしゃぶられてしまう。
ぬちゅぺちゃぴちょ――チュパッ！　チュチュ、むっちゅぅぅ――。
三者三様、まったく異なる舌遣いで微妙にタイミングをずらして舐めてくるから、激発

する肉悦に身構えることもできないし、呼吸を整えてやり過ごす余裕もない。
淫茎の根元にぬちょっと光秀の舌が貼りつくと、
「はにゃうう⁉」
湧き上がる快感が勃起クリトリスの尖端まで一気に走り抜けた。
肉棒の側面に晴信の柔らかな唇が吸いついてくると、
「ひ、ひ……ひぃいっ！」
海綿体に流れ込む血潮が勢いを増し、疑似ペニス全体が青筋を立ててミチミチ軋む。
ジャンヌ学長の舌先が蛇のソレのように閃くたび、
「やめろ、やめ、やめやめダメダメ、本当にダメなんだってばぁあっ！」
猛々しく怒張した淫棒に痺れるような快感が産みつけられた。血管の網目に沿ってチロチロされれば肉傘がさらに大きく、さらに硬くなり、カリ首をせせられれば尖端の小さな穴から生臭く香る透明な滴が、コプ、コプ、と溢れ出してくる。
「ふにうぅ、くひぅぅぅ……う、あ、ああっ⁉　なんだコレ、コレ……熱い、熱い熱い、オチンチンが、ああ、ああ、熱いいいっ！」
あり得ない器官の芯に、あり得ない衝動が膨れあがった。
なにかが煮え滾っている。
閃く舌に舐めまくられ、柔らかな唇に吸い立てられている淫棒に、熱い感覚が迫り上が

り、天を向いた鈴口がこらえがたくムズムズとして――。
「な、なにか出る……オチンチンから、なにか……うぅ、く、ぁああ――――ッ！」
――ビュクッ！　びゅるるっ！　どぴゅぴゅっ！
ブルルッと震えた巨根が白濁液を噴いた。
「にゃ、ひ、ぁぇあああ――――ッ！」
疑似尿道を駆け抜けていく、熱い粘液。
肥大化クリトリスの内側に激震を刻み込まれ、弾けるように反り返る信長。
（な……ん、だ……これ……）
初めて体験した射精絶頂は、自慰の悦びともクンニされたときの快感とも、まったく異なっていた。
脳天に大きな穴が開き、魂まで蒸発していくようなえもいわれぬ解放感。
勢いよく迸った疑似精液とともに理性まで噴きこぼれてしまったのか、もはやなにも考えられない。恥ずかしさすら感じない。
「あ……は……あぁぁ……」
跳ね上がったまま仰向いた顔は恍惚に蕩け、いつも不敵に微笑んでいた瞳が淫悦に潤み――わななく唇から、掠れた春声とともに愛蜜のような涎がトロリ、と溢れ出してくる。
赤らむ頬に法悦の涙が伝い落ち、乱れた呼吸に合わせて大きく上下する胸には、桜色に火

照った美乳がゆさり、ゆさりと重々しく揺れる。
真上に吹き上がった青臭い滴は、疑似男根に唇を寄せていた光秀の額や眼鏡に、晴信の黒髪に、ジャンヌ学長のキッチリと編んで頭に巻きつけた三つ編みに――大粒の滴となってベチャ！　ベチャ！　と降り注いだ。
「ああ……熱、イィ……」「なんて、濃い……匂い……」「ざ、ザーメン……」
蕩けた声をこぼし、うっとりと目を細める三人。
濃密な精液を仰向けた顔に浴びて満足したのか、それとも四郎の術のせいなのか――牝犬のように昂奮していた光秀たちは、急にクタクタと崩れ落ちた。
「なぁに？　三人揃ってだらしないわねぇ」
苦笑したエリザが縄を揺らし、信長の傍から引き剥がしても、力の抜けた手足を投げ出し、心地よさげに微笑んでいるだけ。
信長は――。
（ま、まずい……イッちまった……）
蕩けきった頭の隅でぼんやり思い、それから急に、頬をカァッと赤らめた。射精したばかりの淫棒が再びもどかしくなり、遙かな高みから無理矢理引き下ろされたのだ。
「い……いまのは違う、違うんだ……気持ちよかったわけじゃない、ただ、我慢できなかっただけ……アタシ、イッてない、イッてなんか……ない……」

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/

仙獄学艶戦姫 ノブナガッ! comic

信長たちが

信長が、秀吉が、義元が、エッチにバトルにと漫画で大活躍！
もうひとつの『仙獄学艶戦姫ノブナガッ!』がここにある!!

毎月中旬
発売!!
18歳未満の方は
購入できません
18

漫画：老眼
原作：斐芝嘉和
キャラクター原案：SAIPACo.

戦うヒロインが屈服させられちゃうアンソロジーコミックス
『闘神艶戯』偶数号にて連載中!

編集・発行 キルタイムコミュニケーション
〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル TEL:03-3555-3431(販売) FAX:03-3551-1208
http://ktcom.jp/

ATOMIC POCKET NOVELS NEW RELEASE

あとみっく文庫最新刊

ちょっと大人のライトノベル／毎月下旬ぞくぞく刊行中!! 定価／本体690円（税込）

呪詛喰らい師（カースイーター）

［小説：蒼井村正／挿絵：或十せねか］

全国書店で好評発売中

セクシー退魔師が神様をご奉仕で鎮める伝奇アクション!

ピルグリムメイデンII 白装の騎士

［小説：狩野景／挿絵：ぽち。］

全国書店で好評発売中

不死者を滅ぼす白刃が舞い踊る!

ちょっぴりマッドな聖女様が学園を舞台に大暴れ!!

魔海少女ルルイエ・ルル

［小説：羽沢向／挿絵：ピエール・よしお］

2010 5月下旬 発売予定!!

「魔法の天使ルルイエ・ルル!
地球の未来はルルにおまかせよっ★」

既刊LINEUP

全国書店で好評発売中

- ●仙獄学艶戦姫ノブナガ!! ①〜③
- ●思春期なアダム ①〜②
- ●絢爛!帝都少女探偵団 赤い謀略を撃て!
- ●借金お嬢クリス ①〜②
- ●プリンセスリバーシ!! 交錯する美姫と魔姫
- ●BLANGEL 輪になって踊る愚者の夜
- ●無敗の姫騎士がトM に目覚めたようです
- ●ピルグリムメイデン 深紅の巡礼聖女

KTC 発行◎株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル TEL:03-3555-3431（販売）FAX:03-3551-1208

▶最新情報は公式サイトへ！ あとみっく文庫 検索

あとみっく文庫 既刊情報

仙獄学艶戦姫ノブナガッ！
第一次水着大戦

超能力者の少年少女たちが集う特殊な学園――西開学園、北宮学園、聖ジョウント学園。それぞれが仙獄島の覇権を求め、ちょっとHな三つ巴バトルの幕が開ける!!　平和なはずのミスコン勝負は、暗殺騒動が起きたり水着美少女が縄で緊縛されたり触手生物が現れたりで、とんでもない方向に進んで――!?

小説●斐芝嘉和
挿絵●SAIPACo.

全国書店で好評発売中

仙獄学艶戦姫ノブナガッ！ 弐
北宮学園生徒会長選挙戦

絶対的な権力を誇る北宮学園の生徒会長の座を競い、義元、氏康、晴信ら北宮三大美女はもちろんのこと、長尾〈美姫〉景虎、宇佐美〈奈々〉定満といった新ヒロインも加わり、エッチにバトルを繰り広げる!!　敗北したヒロインは勝者の奴隷に!?

小説●斐芝嘉和
挿絵●SAIPACo.

全国書店で好評発売中

詳しくはKTCのオフィシャルサイトで http://ktcom.jp/

あとみっく文庫 既刊情報

仙獄学艶戦姫ノブナガッ！ 参

信玄、出陣！

北宮学園の生徒会長選挙戦も大詰め。肉欲に堕ちた義元と氏康を従えた景虎は、更なる戦力の拡大を図る。そんな中、信玄は元凶である按針を倒そうと信長に協力を求め、聖ジョウントのエリザは封印された化け物を発見する。様々な思惑が交錯する物語は佳境を迎え、信長は姦落の危機に陥るのだが!?

小説●斐芝嘉和
挿絵●SAIPACo.

全国書店で好評発売中

BLANGEL

輪になりて踊る愚者の夜

月下の街を紅に染め上げる、鮮血のサスペンスアクションの幕が上がる! 吸血姫アリシアは異形の生物「被験体」の影を追って戦い続けるが、予想もしない反撃に遭って虜囚の辱めに晒されてしまう!! 『隔月刊コミックヴァルキリー』の長期連載人気漫画が待望の小説化!

小説●夜士郎
原作・挿絵●渡瀬行人

全国書店で好評発売中

詳しくはKTCのオフィシャルサイトで http://ktcom.jp/

あとみっく文庫 既刊情報

思春期なアダム

謎の少年ルシアの手で“蛇眼”の力に覚醒した藤田睦月。世界の半分を支配する秘密を秘めた彼をめぐり、天使と悪魔そして人間による争奪戦が始まった！　ごく普通な少年の日常は一変し、美少女天使のエンジュや憧れの同級生伊部草マキナまで巻き込み、激しくそしてエッチに胎動する!

小説●さかき傘
挿絵●天海雪乃

全国書店で好評発売中

思春期なアダム2 背後をねらう者

「世界の半分を支配する力」を秘めた“蛇眼”の持ち主として、天使たちに保護されたごく普通の少年、睦月。それでも普段通りの学園生活を送る彼の前に、新たな刺客が現れる…。天使・悪魔・人間の三つどもえのバトルはより過熱！“蛇眼”をめぐり迫り来る美女に美少女&美少年(!?)たちの誘惑で、睦月も新たな局面に…?

小説●さかき傘
挿絵●天海雪乃

全国書店で好評発売中

詳しくはKTCのオフィシャルサイトで http://ktcom.jp/

あとみっく文庫 既刊情報

借金お嬢クリス
42兆円耳を揃えて返してやりますわ

異世界の住人・ジグレットの奸計で父を失い、突如無一文となった令嬢クリス。なんとその借金額は42兆円！　クリスは借金取り立てに現れた武装精霊ガーランドの力を借り、ジグレットへ借金返済の戦いを挑むことに！　果たして、傲岸不遜な令嬢はセレブな日常を取り戻し、己の貞操を守ることができるのか!?

小説●筑摩十幸
挿絵●了藤誠仁

全国書店で好評発売中

借金お嬢クリス2
42兆円踏み倒してやりますわ

セレブから無一文に転落したクリスは、借金を返すために今日もバイト&バトル!?　水着コンテストで痴態を晒し、工事現場で肉体労働&ガーランドからの肉体調教と、八面六臂の活躍（?）に加え、ライバルのロリ令嬢、サキも加わり、エッチ&借金バトルはより熱く燃え上がる!

小説●筑摩十幸
挿絵●了藤誠仁

全国書店で好評発売中

詳しくはKTCのオフィシャルサイトで http://ktcom.jp/

コミックス同人誌版も発売中!

全国の同人誌ショップ、キルタイムコミュニケーション通販にて取り扱っております。

KTC サイト http://ktcom.jp/

title:

ノブナガ繚乱!

lineup:

『明智の策略』 トキサナ

『ドSの流儀』 chaccu

『生徒会長前哨戦?』 天道まさえ

title:

発情期なアダム

lineup:

『いつもの学園生活』 天道まさえ

『天使の誘惑』 ウメ吉

『ELECTRIC LOVE』 空木次葉

電子書籍版もあります!

各種ダウンロードサイトにて発売中!

※18歳未満の方は購入できません。

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

http://ktcom.jp/

◎雑誌、コミック、小説の**通信販売**もやってるよ!
◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルの**バックナンバー**も買えるよ!
◎**ジャンル別**で作品も選べて超便利!
◎二次元編集部の愉快な**Blog**も更新中!

KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!